

だから「昼食は簡単に」となった。だが、劉穎さんが選んだデザートに私は大喜び。それは「小窩頭シャオウォートウ」。西太后は「義和団の乱」で、8カ国連合軍からの攻撃から逃れるために北京を脱出し、西安へ逃避した。その途中で側近が探してきた農民食。空腹のあまりに「おいしい、おいしい」といって「窩窩頭」を食べたが、紫禁城に戻った後も、生涯食卓に出させたとか。



「それでは！」と、移動開始、南京城の石垣は続き、随所で遺跡の発掘調査が



繰り広げられていた。やっと目的地にたどり着いた。





この 300000 という数字は何を意味するのか。日本には南京の集団虐殺はなかったという人もある。私も、あって欲しくない。だからと言って、「なかった」という言葉を独り歩きさせる分けにはゆかない。是非とも被害者の訴えを真正面から受け止め、自分なりの意見を固めたい。戦争には尋常ではないことが生じかねない。それを加害側が十分に確かめず、不用意な意見を述べることは許されない。加害者には上層部への克明な

記録が求められたはずで、その記録さえ提示すれば、すぐに片付く問題である。

その記録を作為的に無くしておきながら、「なかった」と言えば、その品性さえ疑われかねない。もちろん私も、30000 という数字は誇張であってほしい。だが、それを正すための記録を処分したから「なかった」では、卑劣で卑怯のそしりをまぬがれず、同調できない。そこで、この旅では、この施設を訪問先の第1 候補に挙げた。



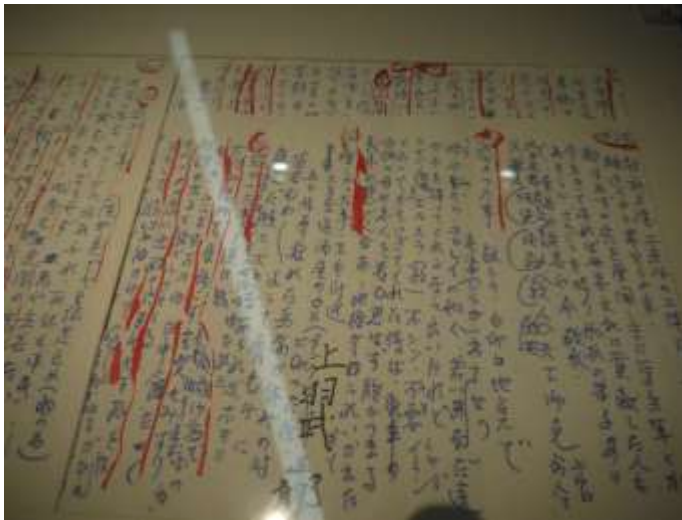




どのように侵攻し、どのような足跡を残したのか、おびたしい写真を交え、丁寧かつ克明に説明が加えられている。こうした資料や写真を捏造、と言い張る人もいる。

記録は、多くの日本兵も手記として残していたようだ。進軍や手柄のほど。恐ろしかった事、楽しかった事など、心境まで克明に残した兵士もいた。





日本兵の手記や日記だけでなく、当時の日本の報道関係資料もあった。その中には、幼児期に顔に強烈に焼き付けた写真や、国民を熱狂させたと聞く記事もあった。



他方、初めて目にした、あるいは知り得た写真や資料もたくさんあり、報道のあり方や社会のあり方も振り返らざるを得なかった。川は遺体で埋め尽くされていたかのようだ。聖戦に駆り出された形の皇軍兵士やその復員兵の心境にも迫りたくなった。



肉弾戦を体験し、命に対する意識が麻痺したり生命が脅かされたりすると、人は常軌

を逸したような行動にも出かねまい。それは、性の問題処理では如実に現れかねないはずだ。それだけに、被害者やその近親者の立場や心境などへの配慮が必定と思う。

上官の命令に絶対的服従を強いられていた兵士であれば、これは兵士の問題というよりも上官の、ひいては国家の、行き着くところは戦争が侵させた罪ではないか。

だから日本は、憲法に9条を設けたのではないか。2度とこのような過ちを国民に侵させたり、罪や罪の意識を背負わせたりはしないようにと決意して、為政者を縛る、制御させる法律である憲法を謳いあげたのだろう、そう思うことで心を静めた。



ドイツは、末期には本国が侵攻され、肉弾戦場になっており、被害国がごとき戦場にしてしまい、国民に辛酸もなめさせている。だから、その原因を造った戦犯を今も自ら厳しく断じ続けているのだろう。また、その憲法（基本法）には「9条」に当たる条文はないが、兵士に「抗命権」を与えたのだろう。兵士の中には混乱に乗じて、何をしでかすかしたものではない、との判断が責任の所在を明らかにさせたのかもしれない。







こうした資料をどうして日本は自ら公開しようとししないのか、と思った。原爆被爆展と共に公開して、戦争がもたらす事実を、その悲惨さや残酷さを国民が認識し、憲法9条の意義を心に刻み、これを堅持する国であることを誇ってはどうか。それは愛国心の源泉になるだけでなく、国際的信用を打ち立てる源泉にもなるに違いない。

幸か不幸か日本は、先進国の中では最も地下資源などのない国である。あるのは綺麗な水と、風光明媚で独特の歴史に裏打ちされた観光資源、そして勤勉で知られる国民ぐらいである。つまり、恨みを買ったり、恐怖心を抱かせたりしない限り、攻撃しても労多くして得るものがない国である。むしろ、温存したい国土と国民である。

しかもサムライニッポンで知られている。殺人剣を活人剣に改め、剣術を「剣道」にして300年近く戦争のない時代を誇らせた国であり国民だ。それが日本ではないか。このような思いまで胸に抱きながら見学を進め、次第に背筋を延ばし始めた。

当時の南京では、多くの外国人がちくいち目撃したことを記録し、世界に発信していたようだ。多くの報道記者も詰め掛けていたことだろう。南京や上海などで日本軍がなしたこと、日本がなさせたことは、リアルタイムに世界中に報道されていたようだ。



彼らの観察眼や、視野や視界がいかほどであったのか、分らない。他方、日本兵のそれらは分かりそうな気がする。南京市の面積は東京都の3倍であり、南京城は山手線内側の8掛けほど、皇居の41倍である。そこで体験した多くの報告は群網像を撫でる、

になりかねない。その意見の勝手な選抜や、いわんや拡大解釈は許されないだろう。逆に、たとえ1例であれ、私は『歌集 小さな抵抗 殺戮を拒んだ日本兵』での1人キリスト者が、生きて日本に帰れた事実にあ堵する。

同様に、とても気になるパネルがあった。もしや、との思いで記録した。



この寂然法師は何者か、栖霞寺で何が生じていたのか、知り得ることなくこの施設を後にしたが、このレポートを記すに当たり、また劉穎さんのお世話になった。

寂然法師は少年時代に出家した中国人で、宝華山や天善寺で修行を積んだ後、栖霞寺の住職となり、1938年3月、栖霞寺で2.4万名の南京大虐殺で生き残った難民を救い、翌1939年10月に、過労で亡くなっていた。

1937年の冬、栖霞寺に難民たちが押しかけ、慌てた寺の主事たちは逃げ出し、寂然だけが残し、責任者として指揮を執った。この時、10名の若き修行僧と200人分の出家者のための食糧しかなかった。そこに2万人が押し寄せ、庭や洞窟に住み着いた。

食事を一回に減らし、米飯をお粥に変えても足りない。まず周りの地主にお布施を請い、最後は安全区や敵の占領区にまで食糧を盗みに行ったという。

おそらく日本軍は、南京市の点と線しか制圧していなかったのだろう。日本国民は、この点と線の制圧を、あたかも南京という面の制圧かのように解釈し、列提灯行列をしたに違いない。その点と線や、それ以外で、何が生じていたのか、と私は気になった。



寺には危険な人物（30 数名の国民党軍人）もかくまっており、廖耀湘（日本軍と中国共産党軍と戦っていた国民党司令官）もいた。もし日本軍に見つかれば、皆が殺されるに違いない。だが、一週間ほどで、廖は無事に江北へ移っていった。

寂然は、安全区なら「命が保証」されるに違いないと思い、地面に大きく「安全区」の三文字を書いた。その後、空爆は無くなり、法師は安全区の無事を模索した。幸いなことに、弟子・月基は 14 歳の時に日本へ留学しており、しかも当地域を管理する日本軍指揮官と校友だった。だから災難を免れたが、それは指揮官交代までの話しであり、その後は悪夢のような日々が始まることになった。

ある日、一人の日本兵が酔って寺に入り、「女を出せ」とわめき、建物に向かって発砲した。銃弾は壁の板を破り、隠れていた子どもに命中した。怒った群衆は日本兵を殴り殺してしまい、災いを招くところとなった。日本軍は二万人に殉死を命じたが、寂然は日本語が達者な弟子・月基を連れて日本軍の司令部を訪れ、交渉した。「その日本兵は足を滑らせ、墜落死だった」との嘘で巧みに相手を信じ込ませ、何万人の命を救った。

そして、寂然は下の『抗議文』を記し、デンマークの実業家シンドバークを通して、ドイツ中国支社総責任者のジョン・ラーベに渡し、英訳の抗議文は日本大使に手渡された。このエピソードは『ジョン・ラーベ日記』に記録されている。

『人類を代表し関係者の皆様へ』

南京が陥落して以来、毎日数百人が寺に保護と食住を求めに来ている。私がこの手紙を書いている時点では、すでに 2. 4 万人が寺に集まっている。その大部分が婦人と子どもたちで、男性の殆どは銃殺され、或いは日本軍に捕まえられ重労働に服している



巨大な施設の見学を終えた。出口への通路にも 300000 の数字があった。この戦争が強い犠牲が、未来の平和への礎となるようにと願い、その願いこそが犠牲者の鎮魂であらう、と肝に銘じながら、とても重い足を一步一步運んだ。



今にして思うことだが、栖霞寺で生じたことに心惹かれてヨカッタ、と思う。日本兵や日本がおかれていた立場や、点と線の征圧地と、その他の広大な地域でのありようにも半歩踏み込めたように思った。

ジョン・ラーベは（やがて三国同盟を結ぶことになる）ドイツの商社から派遣されていた。ナチ党员だったラーベが関わったとされる「安全区」。その成り立ちについての新情報。寂然法師。その弟子月基と、その日本留学時代の校友。やがてラーベは日本軍に南京を追われ、帰国して三国同盟に反対した、これらのエピソードを掘り下げたくもなった。だがすぐに、もっと大事なことがある、と思い直した。

実は、私は数少ないが、太平洋戦争下でも、リーダー次第で日本兵が尊敬される民として生をまっとうした事例に触れている。リーダーが高潔であれば、その指揮に従うだけでなく、その方向で、持てる資質を自発的に発揮していた。逆に、異なる方向へと誘われると、逃避行が独断で可能な特攻兵器であれ、命令に忠実に命と共に散華してしまう。

南京大虐殺記念館では、南京大虐殺問題を生じさせた命令者や、その戦争自体の末路の一端、東京裁判を紹介する一角もあった。この一角では、こうした人たちや、こうした人々を輩出する戦争そのものを2度と生じさせない民になりたい、と願った。





それだけに、戦争が人間にもたらす問題提起もしたくなった。核兵器の非人道性を世界に周知させうる唯一の資格者、被害者だから、こうした加害の記録も克明に日本でも公開できる民、真の愛国心を備えた民になりたい、と願った。つまり、戦争がもたらす加害も被害も共に、人類が共有すべき負の遺産として受け止め、その原因である戦争の防止に努める民だ。それが、第3者の共感も促し、平和をもたらす真の愛国心だろう。

南京大虐殺記念館を訪ねてヨカッタ。中国は、この日本が侵略した戦争で、多大な犠牲をこうむったが、戦後その賠償請求権を放棄した。それは戦争で辛苦をなめた日本の民を、さらに苦しめかねないとの配慮であった、と聞いていた。このたびは、中国の民は、内戦が続いたこともあって8年余にわたり、計り知れない辛苦を舐めていたことを如実に知り得た。



南京での日程は終わった。南京南駅 15:32 の高速鉄道に飛び乗り、西安北駅を目指すことになった。南駅は広く、人は多い。和平の像に見送られるがごとき高速鉄道は清潔で、5時間弱の乗車は快適。車中の弁当ですませ、最終日に備えた。

